

## 子どもの「生きられた世界」：ボーボワール著『古い』に学ぶ

吉田章宏

© A. Yoshida

子どもの「生きられた世界」について、ボーボワールの描いた老人の「生きられた世界」と対照して、考えることを試みる。

「子ども」の「生きられた世界」とはいかなる世界か。子どもはいかなる世界を生きているか。それが、ここでの、我々の「問い」である。将来の時間が残されていないかどうかということについては、健康な子どもと、例えば、癌に冒されている子どもとでは、その状況は異なる。ここでは、時間の制約から、主として「平凡で普通の」健康な子どもに限定して、考えることとする。／「人間は、早死にするか老いるかのいずれしかない」。「子ども」とは何かを真正面から論じるのは、無謀というものだ。ここでは、ボーボワールによって開かれた、生きられた時間という展望のもとで、老人と対比される限りでの子どもの生きられた世界を、考える。

一人ひとりの子どもは、その未来に、早死にするか老いるかのいずれかの可能性を残している。それに対して、老人は、既に、早死にするという可能性は残されておらず、老いて死ぬ可能性のみしか残されていない。

老人であるXさんが「出会う」ことになる／ことのできる「子ども」は、決して、一通りではない。まず、少なくとも、以下のような多種多様な「子ども」が考えられる。

エリクソンの「子ども」西平直著『エリクソンの人間学』東京大学出版会／99-100ページ／「大人が幼児期に対して持つ関係」：「すなわち、今や過去のものとなり、しかも自らのうちにある自分自身の幼児期への関係（to his own childhood, now behind and within him）、現在目の前にいる自分の子どもへの関係（to his own child before him）、周りにいるすべての人の子どもたちへの関係（to every man's children around him）」

「子ども」：A：老人（老女）であるXさんが、典型的には、結婚によって設けた、子孫のひとりとしての、子ども。息子あるいは娘など。「うちの息子／娘」

B：老人（老女）であるXさんの、息子あるいは娘などが、典型的には、結婚によって設けた、子孫の一人としての、子ども。孫息子あるいは孫娘。「うちの孫／孫娘」

C：老人（老女）であるXさんとの血縁はないが、Xさんの周囲で生活している、幼少年期を現在生きつつある、それぞれの誕生からの年数が少ない年少者としての、子ども。それは、知人のYさんの子どもであるかも知れない。それから、例えば、「近所の子ども」、「世田谷の子ども」、「東京の子ども」、「日本と世界の子どもたち」など。

老人の生きられた世界において経験される「子ども」

D：老人（老女）であるXさんの「生きられた世界」において、現在も生き続けている「子ども」、「内なる子ども」。「老人の中にもその幼児期が生き続けている」。「子どものように、朗らかに笑う。」その人の笑顔に、その人の子ども時代が現れて来る。「子どものように、我がまを言い出す」、「老いて、内なる子どもが、甦って来る」など。E：老人（老女）であるXさんの「生きられた世界」において、現在のなかに甦ってくる、自分自身の「子ども時代の私」。子ども時代の失敗を思い出して、その時の恥ずかしさに思わず、今の私が顔を赤らめる、など。

F：老人（老女）であるXさんの「生きられた世界」において、回想のなかに甦ってくる、回想された、しかし、その回想のなかで生き生きと経験される、自分自身の「子ども時代の

私」。「子どもの頃の私は、いかにも、腕白だったなあ。」「お転婆だったわ」、など。

G：老人（老女）であるXさんが、老年期に入ったがゆえに、その在り様が子どもに近づくという意味での、その近づいて行く先としての子ども。「うちのお祖母さんは、すっかり、まるで子どものようになってしまって……。勝手に、我がままで、何も分からないのだから。」「なきべそで、頼りなくて、寂しがりやで、心細がりやなのだから。」

HI：老人（老女）であるXさんが、他者である〔老人（老女）とは限らない〕Yさんの生きられた世界において、現在も生き続けている「子ども」、「内なる子ども」。

I：老人（老女）であるXさんが、他者である〔老人（老女）とは限らない〕Yさんの「生きられた世界」において、現在のなかに甦ってくるYさん自身の「子ども時代の私」。J：老人（老女）であるXさんが、他者である〔老人（老女）とは限らない〕Yさんの「生きられた世界」において、回想のなかに甦ってくる、回想された、しかし、その回想のなかで生き生きと経験される、Yさん自身の「子ども時代の私」。

IK：老人（老女）であるXさんが、他者である〔老人（老女）とは限らない〕Yさんが老年期に入ったがゆえに、その在り様が子どもに近づくという意味での、その近づいて行く先としての子ども。

IL：そのほか、さらに、さまざまな状況のもとで、出会う、「現実」あるいは「虚構」のなかの「子ども」。例えば、小説、絵画、映画、音楽、……。

これらは、互いに交わり、そして、響きあい、豊かな様相を呈する。

## 子どもの生きられた世界

子どもの生きられた世界を、その生きられた時間を中心に、考える。そのために、ボーヴォワールの『若い』における、老人の生きられた世界についての解明、ことに、その生きられた時間を中心とする解明を、その図と地を逆転させることを試みる。ボーヴォワールの『老人の生きられた世界』の生きられた時間の視点からの解明を、いわば陽画とするなら、その陰画として、『子どもの生きられた世界』を描いてみる。そうすることにより、子どもの生きられた世界が、老人の生きられた世界との鮮やかな対照において、浮き彫りとなってくる。この解明は、決して包括的ではない。さらに多くの余地が残されている。ここでの陽画から陰画への反転の意味と目的は、受講者のそれぞれが、自ら、このような試みをなして、『若い』を、さらに豊かな読みを、誘い促すことである。

数字はボーヴォワール『若い』のページ

427 / 「生きてあること〔実存すること〕、それは人間存在にとっては、己を時間化することである。すなわち、現在において、われわれはわれわれの過去を乗り越える投企によって未来を志向する。そしてこの過去のなかにわれわれのもろもろの活動は落ち込み、惰性態と化したもろもろの要求を背負ったまま、凝固する。」

「人は老人を次のように定義しうるだろう。自分の背後に長い人生をもち、前方にはきわめて限られた存続の希望しかもたない者である、と。」

\* (1) 「人は子どもを次のように定義しうるだろう。自分の背後には短い人生しかもたず、前方には無限とも思われるきわめて長い存続の希望を、（現実には早死にの可能性もあり、また、いずれにせよ、人間の生涯は有限に過ぎないのであるが……）もつ者である、と。」

〔ここで、私たちは、時間、空間、他者と自己、身体、言語、映像……の相互関連からして、生きられた時間の性格が、それらすべてに及ぶ変化を、可能な限り豊かに、想像しなければならない。章宏〕

## 現 在

\* (2) 子どもは、現在に生きる。満足感をもって想起すべき過去をもたず、未だ希望や予期は貧しく、確たるかたちを取るには至っておらず、そのことに対応して、生きられる時間は、現在に集中している。それだけ、現在は、子どもの生きられる時間のなかでは、相対的に、もっとも充実して豊かに生きられている。

\* (3) 『彼は、思い出よりも、希望によって、さらには、現在への没頭によって生きる』

\* (4) 子どもにおける、現在への偏愛は、「明日の百より、今日の五十」という態度として表れる。

\* (5) 子どもは、未経験であるからして、青年期も成人期も予期することはできず、まして、老年期を思い描くことはできない。

\* (6) 未来は、無限定である限りにおいて、無限とも思われ、人間の有限性など、思いも及ばない。前方には、「無限の可能性」が開かれている、と経験される。それだけに、「怖いもの知らず」である。しかし、その「無限の可能性」が経験されている程度に対応して、その未来への投企は、希望や計画というよりは夢想に近く、具体性に欠け、内容も貧しい。しかも、本人は、そのことに気付くことができず、また、気付いてもいない。

\* (7) 夢は、具体的な姿を備えた憧れの他者に託されることがある。英雄像、スポーツマン、ヒーロー、アイドル、など。

## 過 去

428 / 「満足感をもって過去を想起するのはとくに年取った人びとである。『彼は希望よりも思い出によって生きる』ことにアリストテレスは留意した。」

「遠い昔の日々へのこの偏愛は大部分の老人に見られることであり、それはしばしば彼らの年齢がもっとも明瞭に看取される兆候でさえあるのだ。」

モーリヤックの言葉「老人はたとえ幼少年期に戻りはしないとしても、彼はひそかにそこに立ち帰る。そして小声で、ママ、と呼ぶ喜びに身を任せる。」

「過去が生きているか否かを決定するのは未来である」（サルトルの言葉）。進歩することを投企（くわだて）としてもつ者は彼の過去から離れ去る。彼は彼のかつての自己を彼がもはやそうではない自己として規定し、それへの関心をなくす。その反対に、ある種の対自存在の投企（くわだて）は、時間の拒否と、過去との緊密な連帯とを必然的にふくむ。大部分の老人の場合がこれであり、彼らは失墜したくないので時間を拒否し、彼らのかつての自己を彼らがそうでありつつける自己として規定する。すなわち、彼らは彼らの青春との一致連帯を主張するのである。

内心では昔のままだという確信を持ちつづけている。

ときには彼らは過去の自分のなかでもっとも誇りうる人物を現在の自分と同一視することを選ぶ。勇敢な兵士、もてはやされた女性、あの讃歌すべき母親。

429 / 「世界がその相貌を彼らにあらわした時期、彼らが後にそうなったところの人間が形を定めた時期、すなわち幼少年期をふり返る。」

\* (8) 「幼少年期は、子どもである彼らに世界がその相貌をあらわす時期であり、彼らがそうなるところの人間が形を定める時期である。」

\* (9) 「子どもは、まだ、自分に物語るべき自分の歴史をほとんどもたない。」

\* (10) 「子どもは、現在、その後の一生を通じて想起されることになる、身近な人々のイメージを形成しつつある。」

自分の歴史(みのうえ)を自分に物語ることをある程度まで可能にしてくれる。

想起されるイメージには、「一種の本質的貧しさ」が存在する。イメージは対象をその一般性において示すのだ。

431 / 「人は過去を推測するのだ。」(アンリ・ポアンカレの言葉)しかし、正確なイメージもある。 「私の子供時代の全時期を通じて、[女中の]ルイーズ、私の父、私の祖父の顔は不変なのである。」

432 / こうした固定映像は変動する世界のなかで永続する。

「年月の経過のなかで、われわれにはつねに現在の時点が自然であるように思われる。」

「事实は、われわれが過去のイメージをふたたび見るとき、それらはすっかり古びて見える。かつてわれわれの人生は新しさであり、新鮮さであったのだが、そのみずみずしさまでも失われてしまったのだ。」

「過去がわれわれを感動させるのはそれが過ぎ去ったものであるからだ。しかしまたそれだからこそそれは実にしばしばわれわれを失望させもする。すなわち、われわれはそれを、未来へ向かって躍進していた現在、未来にみちた現在として生きたのであった。が、いまはその残骸しか残っていないのだ。これが、思い出の土地へ再遊することをじつに空しいものとするゆえんである。」

\* (11) 「子どもは、現在を、無限とも思われる未来に満ちた現在として生きている。しかし、その現在を、将来、『未来に満ちた現在の残骸』として生きることになることは、夢にも予期していない。」

\* (12) 「子どもはまだ、時間によっても、空間によっても、その固有の仕方で裏切られるという経験には乏しい」

時間はわれわれを裏切る。空間も、その固有の仕方で、われわれを裏切る。

場所は変化する。たとえ外見上は昔と変わらない場所でも私にとっては昔のままではない。・・・かつての私の計画、欲望、不安などをふたたび見いだしはしないだろう、つまり、私は私をふたたび見いださないのである。

「過去における未来は、もはや未来でなくなったばかりでなく、それはしばしばわれわれの期待を裏切りながら現実化した。」

\* (13) 「子どもは、未来による深刻な裏切りを、まだ経験していない。」

\* (14) 「子どもは、永遠の友情の始まりを信じることができる。」

\* (15) 「若者は、過去において期待した『永遠の愛』に裏切られた経験に乏しい限りにおいて、『永遠の愛』を信じることができる。」

433 / 434 「私は一度ならず、けっして終わらないであろうと思われた友情の始まりを経験した。そのあるものは期待どおりになったが、なかには無関心あるいは敵意に変わったものさえある。あとで仲たがいとなることによって否定された親愛関係をどう解釈したらよいのだろうか？」(フッサールの否定の意識、懐疑の意識、を参照)

\* (16) 子どもは、「過去の出来事の意味というものはつねに疑いをさしはさむ余地がある。」ということも、まだ、思いも及ばない。

\* (17) 「子どもとは、老人と比べて、自分の背後に少しの死者しかもたない者、なのだ。」

\* (18) 「子どもにとって大切な人の死は、老人の場合と同様に、子どもにとっての過去

の喪失ではある。が、そればかりでなく、それよりもむしろ、その大切な人ともつことができたかも知れない、もつことができたはずの、かかわりの可能性の総体、つまり、かれらとの未来、そして、子ども自身の未来、を奪い去られることなのだ。」

\* (18a) 「子どもとは、自分の背後にごく少数の死者しか持たない者、なのだ」。「ただし、例えば、映画『禁じられた遊び』の少女ポレットを想起したい。」

「われわれにとって大切な人の死は、われわれの過去との急激な断絶をもたらす。・・・老人とは、自分の背後に多くの死者をもつ者、なのだ。」

「近親者、友人たちの死」「われわれの人生のなかで彼らとのかかわりのあったすべての部分を奪い去るのである。われわれより年長の人たちの場合、彼らが彼らとともにもち去るのはわれわれ自身の過去なのだ。」

「六〇歳代の人間が、同じ世代の親戚や友人を失うとき、彼は彼自身について故人がもっていたイメージを失うので悲しむ。故人だけがある種の思い出を分けもっていた自分の幼少年時代あるいは青年時代が故人とともに葬り去られるのである。」

\* (19) 「しかし、子どもは、そのように取り返しのつかない未来の喪失に気付くことができない、また、死のもつ喪失としての決定的な意味を理解できない、そのため、その喪失に直面しても、悲嘆することさえもできない。」

「しかし老人たちに取り返しのつかない悲嘆をあたえるのは、彼らが自分の未来をその人間に結びつけていた、彼らより若い人間の死である。とくに彼らとその人間を産み、育て、あるいは形成した場合であり、子供、あるいは孫の死は、このうえもなく大切な事業の突然の崩壊を意味する。それまでその人間のためにしてきたあらゆる努力や犠牲、彼に寄せていた希望などが不条理にも空と化するのだ。」

435 / 同じ世代の友人の死。「私自身の人生の大きな部分が崩壊したのだった。」

「彼らはこのわれわれの過去を墓にもち去ってしまい、・・・」

「『死者たちの記念碑』、そのなかに葬られているのは私なのだ。」

\* (20) 子どもにとっては、「『死者たちの記念碑』、そのなかに葬られているのは私が、その人々と共有することが可能であったはずの、あるいは、可能であったかも知れない、未知の未来だったのだ。」しかし、子ども自身は、そのことに、少なくとも現在の時点では、気付くことさえもできない。

そのことは、次のことを意味する。すなわち、子ども自身は、未来において重要な意味をもつに至るかもしれない現在のもつ意味に、気付くことができない。また、現在が、将来、現在は気付かれていないような重要な意味をもつことになる、という可能性があることにも、気付くことができない。

\* (21) 子どもは、「夢見られた夢と、実現した夢とのあいだには無限の距離がある。」ことを未だ知らない。

436 / 「アラゴンはあらゆる成功が含みもつ挫折について暗示した・・・」

「夢見られた夢と、実現した夢とのあいだには無限の距離がある。」

マルラメ「夢の収穫（とりいれ）が、夢を摘み取った人の心に、たとえ悔や幻滅がなくとも、残す悲哀の芳香」 / サルトル「未来は追いつかれえない、未来は、旧の未来として過去 [のなかに] 滑り去る・・・」

437 / 「真実は、過去のほうこそわれわれを捉えているということである。われわれは過去がわれわれをそうならしめたもの [現在の自分] をとおして、過去を認識するのだ。自分の現在の状態に不満な人間は過去のなかに、自分の怨念をかりたてるもの、現在をさらにいっ

そう歎かわしく思わせる理由、を見いだすだけである。」

フローベール「過去を現在と比較することによって、彼は自分が失墜した人間であると感じ、一方、この失墜の観念は彼の過去への執着によって強化されたのである。」

過去と現在との対照が耐え難いものとなることもある。プランメル的事例。パスカルの王様。

\* (22) 子どもは、現在を、過去との対照として生きることが少ないので、老人と比べて、現在を現在としてのみ生きる。したがって、老人のように、「過去と現在との対照が耐え難いものとなる」ということがない。現在を、ただ現在として享受し、かつ、忍耐する。

\* (23) 子どもは、長年の後に、老人となった自分にとり憑くことになるはずの幼少年期を、現在生きているのだ、ということを実感することはできない。また、仮にそれを他者によって説明されたとしても、それを理解することは到底できない。しかし、それにもかかわらず、そのような性格をもつことになる幼少年期を、現在の時点で、生きているのである。

438 / 「老人にとり憑くのは、とくに彼の幼少年期である。フロイト以来――そしてモンテニユはすでにそれを予感していたのだが――個人とその宇宙の形成にとって幼年期がいかに重要であるかは人の知るところである。幼年期に受けた印象は強烈で、生涯ぬぐい去ることができない。成人は、それらの印象を想起する閑がほとんどない、なぜなら彼は実生活での均衡をみいだすことに忙しいからだ。しかしこの緊張がゆるむとき、それはらふたたび姿をあらわす。」 / ノディエ「老いてゆく人間に自然があたえるもつとも甘美な恵みは、子供のころのいろいろな印象をきわめて容易に想起することができるとのことだ。」

\* (24) 子どもは、壮年期において抑圧され、老年期になると甦ってくるという性格をもつ、厭な思い出の種子を、つまり、さまざまなコンプレックス、罪障感、恥ずかしさ、不安などを、現在、経験している。が、子ども自身は、そのことには全く気付かない。また、仮に他者によって説明されたとしても、それを理解することはできない。

439 / 「子供は人生について骨の折れる修行をする、彼はうち勝たねばならないさまざまなコンプレックスに悩まされる、彼は罪障感、恥ずかしさ、不安を感じる。こうした厭な思い出は壮年期においては抑圧されているが、老年になると甦ってくる。」

「幼少年期、初期青年期の内的葛藤が甦ってくる。」 / アンデルセンの顕著な事例。アンデルセンの場合は、けっして例外的なものではない。

\* (25) 子どもは、現在幼少年期あるいは初期青年期を生きつつも、「老人性ノイローゼの源泉はすべて幼少年期か初期青年期にあるのである。」ということを知らない。また、知ることがもきない。

\* (26) 子どもは、老人期になって、自分がふり返ることを好むことになるはずの幼少年期を、現在生きているのだ、ということを知らない。また、知ることができない。

なぜ、老人たちが幼少年期をふり返ることを好むか。

「それは幼少年期が彼らを支配しているからだ。彼らが自分の幼少年期のなかに自分を認めるのは、・・・、それが一度として彼らの内部に住むことをやめなかったからである。」

「別の理由がある、すなわち、実存は自己を超越することによって自らを基礎づける、ということである。しかるに――とくにひじょうな高齢に達すると――超越は死に突き当たる。それで老人は自分の生誕あるいはすくなくとも最初の数年間をふたたび自分のものとして身に引き受けることによって自分の実存を確立しようと試みるのだ。」

\* (27) 子どもは、「幼少年期＝老年期は、社会的次元において認められるだけでなく、当人によって、内的経験として生きられる。」 ことになることを知らない。知ることができ

ない。

\* (28) 子どもは、今生きている幼少年期が、将来、自らが老年期において、年取った一人の人間として、求めることになる「自分の幼少年期について詳細で首尾一貫した物語をつくることではなく、ただそのなかにふたたび浸」ることになる幼少年期であるということに、気付くことができない。

\* (29) 子どもは、将来、老年期において、幼少年期の主題を反芻し、繰り返しにあきず、そこから新たな気力を得る、そのような幼少年期を、現在生きていることに気付くことはできない。

\* (30) 子どもは、老人となったとき、老人の「現在から逃れて昔の幸福を夢想する、しかし、昔の不幸は払いのける」、そうした幼少年期を、現在生きているのだ、ということに気付くことができない。

「過去こそが私の現在の状況を、そしてその未来への可能性を決定するのである。それは、私がそこから出発して自分を未来へ向かって投企する所与、そして私が実存するために超越すべき所与なのである。」 このことは、あらゆる年齢において真実である。

「私の肉体のなかに形成された機構を、私が用いる文化的用具を、私の知識と無知を、他人との私の関係、私の仕事、私の義務を過去から受けている。」 / 「人間はすべて彼の実践によって世界 [外界] のなかに彼の客体化を実現し、その [客体化されたものの] なかに自分を疎外する。彼はそこに自分の利害的関心物をつくりだす。」

442 / 「所有者の利害的関心物は彼の所有物であり、しばしば彼は彼の生命そのものより以上の価値をそれに付与する。」 / 老年には、一つの長い人生がそのときのわれわれの背後に凝固して存在し、われわれをしっかりと捉える。もろもろの「しなければならぬと考えること」は増大し、その裏側は数々の不可能事 [してはならぬと考えて、できないこと] である。

\* (31) 子どもには、短く貧しい過去しかないために、老人に比べると、もろもろの「しなければならぬと考えること」は極小であり、その裏側の数々の不可能事 [してはならぬと考えて、できないこと] もまた、極小である。

例えば、他者に対する責任も義務 [しなければならぬと考えること、してはならぬと考えること] も少なく、それだけに、夢想される可能事 [してもかまわないと思われること、できると思われること] は大きい。現実には、大きく制約されているにしても。

たとえば、所有者は彼の所有物を保守しなければならぬので、それらを手放すことはできない、のだ。 老人は、彼の未来を前にして、がんじがらめに縛られている。

\* (32) 子どもは、彼の未来を前にして、自由に解き放たれている。未だ、彼を縛る過去はなく、したがって、過去に縛られてはいない。その意味では、老人に比べて、より自由である。

\* (33) 未来は、彼にとって二重に無限である。長く、開かれている。長いがゆえにいつそう、開かれており、開かれているがゆえに、いつそう長く感じられるのである。

時間と空間の両方の次元において、無限であるように、経験される、ということ。

未来は、彼にとって二重に有限である。短く、閉ざされている。短いがゆえにいつそう閉ざされており、閉ざされているがゆえにいつそう短く感じられるのである。 [いわば、空間と時間の両方の次元において、有限である、ということ。]

## 未 来

4 4 2 / 「ある時期以後——それが何時であるかは個人によって差があるが——・・・彼に残された年月の数は限られている、と」自覚する。

この猶予期間は彼には悲劇的に短く思われるのである。

\* (34) 子どもは、未だ、彼に残された年月の数が限られている、と自覚することは、して／できて／いない。それどころか、そのような自覚が起こる時期がやってくる、ということすら、自覚されていない。彼にとっては、まだ、無限の時間が残されている。

\* (35) 子どもの時間は、老人になってからの時間よりは、ずっと遅く [急速でなく] 進む。

「時間はわれわれの人生のさまざまな時期において同じようには流れないからだ。時間は人が年を取るにつれて急速に進むのである。」

4 4 3 / 「子供にとっては、時間は長く感じられる。彼がそのなかで動き回る時間は彼に課せられている。それは大人たちの時間である。彼はそれを計量する術も、予測する術も知らない。彼は始まりも終わりもない生成のさ中に埋没している。」 / 子供にとって、「日々は努力なしには突破しえない。」 / 「子供のころは世界はじつに新しく、それがわれわれの内部に惹起する印象は実に新鮮で強烈であるので、時間をその内容の豊富さによって評価するならば、それは、習慣がわれわれを貧しくしてしまう年齢期に比べて、はるかに長く感じられる。」 / ショウペンハウアーの言葉。「幼少年期のあいだは、・・・一日一日は際限もなく長い。」 注\*\*に、ジョルジュ・コンダミナスの言葉。「旅行中の一日・・・」

4 4 4 / イヨネスコの言葉。「そして、来年とは言葉にすぎなかった。この来年なるものが来るだろうと考えたとしても、それはじつに遠い先のことと思われたので、それについて考える必要はなかった。それが現実にやってくるまでは、それは永遠とおなじくらい長く、それゆれけっして来ないのと同じだった。」 / 「幼少年期を過ぎると、空間はちぢまり、事物は小さくなり、肉体は力強くなり、注意力は確固とし、人は時計や暦の類になじみ、記憶は広さと正確さを獲得する。それでいて四季は依然として、すばらしいあるいはおそるべき緩慢さをもって回転しつづける。・・・私の足下に拡がった未来の広大さが私の心を高揚させた。あと、四〇年、六〇年も生きるのだ。それは永遠であった、なぜなら、ただの一年でさえ私にはあのように長く感じられたのだから。」

若いときから老年期までに時間に対する評価が変化する理由。

1) 「いかなる年齢にあらうとも、人は自分の全生涯を自己の背後に、同じ大きさに圧縮された形でもっている、ということ・・・」自然に心に浮かぶ印象。「1カ年がわれわれの年齢の5分の1であるときは、それが50分の1であるときに比べて10倍も長く感じられるだろう。」 / 2) 「若い人たちの場合、記憶は過ぎ去った1年を広大な空間にわたって展開された豊饒な細部とともに差し出す。彼らは来るべき年にも同じ [広大な] 規模を想定する。これに反して、年を取るとわれわれに強い印象を与えるものはわずかしかない。刻々はわれわれにわずかしかなしいものをもたらさず、われわれは時々刻々に長くかかずらわない。」 子どもたちには、過ぎ去った1年は、広大な空間にわたって展開された豊饒な細部とともに差し出される。彼らは、来るべき年にも同じ広大な規模を想定する。が、実際は、・・・

4 4 5 / 3) 「私は1年後は、よくて今日と同じだろうということを知っている。これに反して20歳のときは、・・・、一年一年はわれわれを陶酔的なあるいは嫌悪すべき、新しい事物の旋風のなかに巻き込んで運び去り、われわれは変貌して出てくる。そして、近い未来にも類似の激動があるだろうと予感する。」

\* (36) 子どもは、一日一日が、新しい事物の旋風の中に自分を巻き込み、自分と世界を変貌させる。そして、近い将来も、類似の激動があるだろう、と予感している。

「人は外界への期待、自分自身への期待において存在するのだ。」

「幼少年時代を喚起する情緒的な思い出があのように貴重であるのは、それらの思い出がごく短い瞬間ではあるが、われわれに漕ぎたい未来をもう一度所有させてくれるからなのである。」 子供のころ、「明日」は空虚な言葉にすぎず、私は永遠を所有する。

\* (37) 子どものころは、遠い将来情緒的な思い出となるような、漕ぎたい未来を所有するという貴重な経験を現在なしているのだ、ということを知らない。また、知ることができない。

「子供のころの時間の厚みをふたたび見いだすための最良の方法は旅行することだ、と」イヨネスコの考え。イヨネスコの言葉／445ページ。

446 / 「旅行の日々は思い出せば実に長いが、そのときは稲妻のように過ぎるのだ、なぜならわれわれは間断なく緊張していたからだ。」

「老人の視点と小児あるいは青年の視点との根本的な相異は、老人は彼の有限性を発見したが、人生の初期においてはそれに気づかないという点にある。」

\* (38) 小児 [あるいは青年] の視点では、未だ、自らの有限性に気付いておらず、それを発見していない、発見できない。この後、よい言葉が続く。(446ページ)

447 / 「ところが老人は、彼の人生はすでに出来上がっており、やり直しはできないことを知っている。未来はもはや多くの可能性でふくらんではおらず、それを生きるべき [彼という] 有限の存在に比例して収縮してゆく。」

\* (39) 子どもにおいては、彼の人生はまだ出来上がっておらず、やり直しができる。未来は多くの可能性でふくらんでいる。

二重の有限性。第一に、残された時間が有限である。第二に、「人間存在は、たとえ不死であっても、依然として、有限であるだろう。」(サルトル)。「何ものも私を自分自身から脱け出させはしないだろう。」 / 高齢期になると、この両方がいっしょに、そしてそれぞれ一方が他方によって、開示される。 / 「彼の余生は短く限られており、そして彼は決して彼自身から逃れることはできないだろう。」

\* (40) 二重の無限性。第一に、残された時間が無限である。第二に、彼自身が未完成であり、未確定であるがゆえに、その可能性もまた、無限であるかのように、経験される。448 / 「成年期から高齢期にいたるまでに、未来は質的に変化するのだ。六五歳の人は四五歳のときより二〇歳多く年をとっているというだけではない。人は未確定の未来——彼はそれを無限なものに見なしがちであった——を有限の未来ととりかえたのである。かつてわれわれには地平線にいかなる限界も見えなかった、いまやわれわれは一つの限界を見るのである。」

\* (41) 「子どもにとって、未来は未だ、成年期から高齢期におこる質的変化が起こっておらず、また、その変化を予期さえもしていない。子どもは、未確定の未来——それは無限なもの [確信をもって] 見なされている——を有限の未来ととりかえる以前にあり、また、そのようなとりかえが、自分の未来に待ち受けているとも、知らない。また、知ることができない。」

「限られた未来、凝結した過去、これが年取った人びとの直面する状況なのである。」多くの場合、この状況は彼らの活動を無力化する。

\* (42) 「限りない未来、凝結していない柔軟な過去、これが、子どもが生きている状況

なのである。」 多くの場合、この状況は、彼らの活動に生命力を与え、それを活発化する。448 / ミシェル・レーリスの言葉「何か仕事に着手しようという欲望さえ失うことがある。……。人はまだ自分の自由になるわずかの時間を計量する。それは狭く息苦しい時間であり、一つの仕事をのびのびと発展させるのに必要な期間が欠けているなどと考えることは問題外であった時期の時間とはまるで別のものだ。このことが、何かやろうという熱意を失わせる。」

\* (43) 子どもは、無限の未来をもつと経験しているがゆえに、何事に着手してもそれを伸び伸びと発展させるのに必要な時間は十分あると考える。何事であれ、全く新たに始めても、よいのだ。そのことが、何かをやろうという熱意をかき立てる。」

449 / 彼はもはやなんら為すべきことが見当たらないか、あるいはそれを完遂するのに必要な時間がないと考えて事業を断念する。

\* (44) 子どもは、為すべきことが多く、どれを為すか、その選択に迷う。そして、ほんの少しの偶然が、その瞬間に為すことを選択を規定する。何であれ、それを完遂するのに必要は時間はあるのだ、と考えて、あらゆることに手を出すことをしてしまう場合がある。

過去に根ざす定言的命令がその力のすべてを保持している場合もある。そのとき、不安にみちた執拗さをもって、年老いた人間は彼に少しの休息も許さない時計に対して戦闘をひらく、「老いが近づいたときに、閑暇をたのしむ気持をまったく失ったことはわたしのもっとも苦しい経験であった」と、ベレンソン70歳のときの言葉。 / さらに苦しいのは、「依然として大切だと考えている目的を達成することができないことである。」

\* (45) 未来に無限の時間が残されていると経験されているために、時間が不足して、「依然として大切だと考えている目的を達成することができない」という苦悩が、未来に自分を待ち構えていることを、子どもは知らない。知ることができない。

「われわれの投企（くわだて）が、われわれの死の彼方に位置する目標を目指すこともある。」 / 反復的社会、歴史が緩慢に進行する社会では、人は単に彼個人の未来だけでなく、世界の未来をも自由にしうるのであり、彼はそこに彼の仕事の成果が残ることを予測する。その場合、80歳の人間も家を建てたり、さらに樹木を植えたりすることに喜びを感じる。」

\* (46) 反復的社会、歴史が緩慢に進行する社会では、子どもは単に子ども自身のまだ短い過去だけでなく、世界の過去、一族の過去、祖父母、父母の過去を、その背景として背負って、それらの過去に規定されて、それらの人々と社会の期待に応えるように、自らの未来を拘束されることがあった。が、今日の、急速に変化する社会では、そうした過去の規定は比較的軽くなり、それだけ、彼の未来への拘束されない自由は拡大した。逆に、たとえば、祖父母も父母も、彼の未来に、彼らの仕事の成果が残ることは予測できなくなった。

450 / 息子が家業を継ぎ、孫がまた継ぐ、と期待することができた社会。

「彼がそのなかに事故を客体化した所有地あるいは企業は無限に存続すると思われた。彼はそのなかに死後も生きつづけ、彼の労苦も無駄ではなかった、と思われたのだ。」

今日では、年取った人間はもはやこの種の永遠無窮を当てにすることはできない。歴史の運行が急速化したのだ。人が昨日建てたものを歴史は明日破壊するであろう。老人が植える樹木は伐り倒されるであろう。……。 / 「彼が為し遂げたもの、彼の人生の意味を形造っていたものは、彼自身と同様、滅亡に瀕しているのだ。」 / 「多くの場合、父は息子のなかに自分を認めることができない。彼は完全に虚無に呑みこまれるのである。」 \* (47) 父が息子のなかに自分を認めることができないのと同様に、息子も父のなかに自分を認めない。息子は、過去の重みから解放される、と同時に、新鮮なもの、新奇なもの、へ未経験な

まま、飛び込んで行くことができるようになった。それだけ、長い過去の伝統と長年の献身的な修行を必須とする事業〔例えば、伝統工芸、伝統芸能など〕の伝承は、困難となる。

「今日の社会は、・・・、彼がまだ生きているうちに、老人をすでに時代おくれになった過去のなかに投げ込む。歴史の加速化は、年取った人間と彼の活動との関係を激変させた。かつて人びとは、年月の経過につれて経験という財宝が老人のなかに蓄積されると考えた。・・・。それゆえ、不断の進歩の最終段階である老年は、人間存在の完成の頂点である、ということになる。しかし、実際には、人生はこのように展開するのではない。・・・\*（48）過去の重りをもたない子どもは、歴史の加速化も、加速化としては経験せず、いかなる出来事も、彼らの眼前に現れるがままに、受け取ることができる。しかも、その歴史の加速化として受け取られている老人にとっての困難が、何ゆえにまたどのように、老人にとって困難であるのかを、理解することをしない。また、理解ができない。

／451／ 人間存在は各瞬間ごとに自己を全体化するが、全体化はけっして完成されえない・・・『われわれのある部分は硬化し、他の部分は腐る、われわれはけっして成熟しはしない。』・・・。われわれはものを覚え、そして忘れる。われわれは豊饒になり、そして破損するのだ。」

\*（49） 子どもは、「われわれはものを覚え、そして忘れる。われわれは豊饒になり、そして破損するのだ。」ということを理解しないし、理解できない。子どもは、人間は成熟するものである、と信じている。

経験という概念。手工業者。知的な領域では、エリオは「教養とは、人がすべてを忘れてしまったときに、残るものである」と言った。残るもの、例えば、「一度学んだものを学びなおす能力、仕事を進める方式、過誤への抵抗力、危険防止の知恵、など。」／ 総合的視野。／ 452／ 「老いている者しかもてない経験がある、すなわち、老いそれ自身の経験である。」

\*（50） 子どもは、「老いそれ自身の経験」を未だもっていない。

\*（51） 子どもは、時代に落伍することはあっても、時代遅れにはならない。「時代遅れ」になるだけの過去を未だもたない。

\*（52） 仮に、子どもの生成が時代との生成と合致せず、ずれを生じることがあっても、そのずれは、老人におけるずれとの間には、根本的な差異がある。それは、まだ、時代の生成に合致した経験のない子どもと、かつて自らの時代の生成と合致した自らの生成を過去において経験したことがある老人との間の、差異である。

「個人の生成は社会の生成のなかで行われるが、これと合致してはいない。このずれは、自分が生きている時代に必然的におくれてしまう老人にとって不利にはたらく。・・・個人は、投企（くわだて）がその新鮮さにおいて際限なく甦るこのリレー競争に従ってゆく力はない。彼は背後にとりのこされる。変化のさ中で、彼は同じままにとどまる。彼は時代おくれになる（失効する）ほかはないのだ。」

519／「死を前にした人間の態度は年齢によって変化する。」

\*（53） 老人にとっては、死は自らの近い将来に迫っている自らの問題であるが、普通の健康な子どもにとっては〔例外的に、死の病に罹った子どもの場合もあるが〕、死はあくまで自らの問とはとらえられず、常に、他者の問題である。

〔今までは人の事だと思つたにおれが死ぬとはこいつ堪らぬ 蜀山人〕 以上